

**『為家七社百首』の祈りの系譜 - 『俊成五社百首』  
の影響と、為家の独自性について -**

著者	福留 瑞美
雑誌名	國文學
巻	98
ページ	21-32
発行年	2014-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/9226">http://hdl.handle.net/10112/9226</a>

# 『為家七社百首』の祈りの系譜

——『俊成五社百首』の影響と、為家の独自性について——

福留 瑞美

はじめに

第十二番目の勅撰集『統拾遺和歌集』巻七・雑春<sup>[1]</sup>には、

五社に百首歌よみてたてまつりける比、夢の告あらたなるよししるし侍るとてかきそへ侍りける

皇太后宮大夫俊成

春日山谷の松とはくちぬとも木ずゑにかへれ北の藤波

その後年をへてこのかたはらにかきつけ侍りける

前中納言定家

たちかへる春をみせばや藤波は昔ばかりの梢ならねど

おなじくかきそへ侍りける

前大納言為家

言の葉のかはらぬ松の藤波に又立ちかへる春をみせばや

三代の筆のあとを見て又かきそへ侍りし

春日山祈りしすゑの代代かけて昔かはらぬ松の藤波

とあり、御子左家の家門再興への歴代の思いが詠まれた一連の和歌が入集する。御子左家は道長の六男長家を祖とする家で、その歴代の極官を示すと、

・長家…権大納言正二位・民部卿・中宮大夫。

・忠家…大納言正二位

・俊忠…権中納言従三位

・俊成…非参議正三位皇太后宮大夫

・定家…権中納言正二位

・為家…権大納言正二位

・為氏…権大納言正二位

である。したがって俊成にとって「もとの木ずゑにかへるこ

と、すなはち家門再興は悲願であった。そんな思いの中、俊成は「五社に百首歌よみ」奉納して、題ごとの部類本に仕立て直した。

そうして成立した俊成自筆部類本「俊成五社百首」の扉や中間部の遊紙に、「百首歌」奉納後に伝えられた「夢の告あらたなるよし」（伊勢権欄宜荒木田氏良の夢想記）を俊成自ら書き加え、その際に和歌も書き添え、その後も定家・為家・為氏が各々任官の際の感慨を詠んだ和歌も書き加えていった。<sup>2)</sup>

こうして俊成が祈念した家門復興は、定家・為家と経て叶えられ、大納言を輩出する家柄にまで回復する。そして父為家に引き続き自身も権大納言にまで上り詰めた撰者が為氏は、家門再興への喜びや自負を込め、曾祖父俊成・祖父定家・父為家の和歌および自らの和歌をも加えて、「統拾遺集」に入集させたのである。

このように「俊成五社百首」は「千載集」完成後まもなく五社へ奉納された百首歌群であるが、御子左家にとっては歴代の願いが込められた意味深い作品であったのである。そして、この「俊成五社百首」に倣って、為家が六十三歳の折に「為家七社百首」を詠作する。そのとき為家は既に出家していたが、二度目の勅撰集撰者を拝命しており、奇しくも俊成が桑門撰者と

して「千載集」を編纂した時と同じ状況にあったことなどから、先例の「俊成五社百首」を踏襲して、勅撰集完成を含め今後の歌道のことなどを祈念するために奉納されたのが「為家七社百首」である。

### 一、「為家七社百首」の成立事情

「為家七社百首」の成立については、その序文に明らかであるので確認したい。まず冒頭において、

親の親の書きおき侍りける和歌の浦の跡を見侍れば、<sup>〔a〕</sup>家の歌鳥の大和歌をあはせて、難波津のよしあしをさだむることおほくつもりぬる。道をおそれ思ふによりて、<sup>〔b〕</sup>春日、日吉の社に人人すすめて歌合をしてたてまつらんと思へりけれども、みなことうけばかりにて年をおくりければ、<sup>〔c〕</sup>みづから百首歌を詠みてたてまつるべきよしを思ひたはけるに、賀茂、住吉にも同じくはと思ふに太神宮にもまゐらせんとして、五社の百首とて文治六年にはじめて、次の年建久元年によみをはりけるよし見いだして、

とある。「親の親」つまり祖父俊成の書き記した歌書を見ると、<sup>〔a〕</sup>歌合の判者になることも多くなり、歌道に恐れを感じて、<sup>〔b〕</sup>

春日と日吉社への歌合を計画するも、思うように歌が集まらず時が過ぎ、「c」自詠の百首歌に変更して賀茂・住吉・伊勢へも追加奉納しようと思い、文治六年（一一九〇）から翌年に掛けて詠んだ」という内容を見出したという。この傍線部「a」は、「俊成五社百首」の序文、

年比「A」人の家家の歌合にも、又あるいは神社仏寺にも、こ  
とをよせつつ歌合とすすめて、先判をうけんと申すにより  
て、おぼえぬよしなしごとをのみかきつくる事のやくなく  
おぼえて、撰びたるよしを申して、せずなりてのち、よし  
なき判をのみ書き集めたることを思ひて、「春日、日吉の  
社に歌合をしてまゐらせんとて、人人にすすめ侍りしかば、  
上達部たちもおほくことうけはしなながら、何となくておく  
られざりしかば、今はとげがたかるべしとて、「そのかは  
りに両社に、あやしくとも百首の歌をだにのみみてたてまつ  
らん、と思ひなりて、文治五年より思ひたちて、詠みつら  
ね侍りし程に、住吉、賀茂などにもまゐらせてやはと思ふ。  
又、大神宮にまゐらせてはいかがはとて、五社百首とて詠  
みそへて、文治六年建久元年の春ぞ清書してたてまつり侍  
るべし。

によるもので、傍線部「A」は「C」の順序そのままに要約し

たものであることがわかる。つまり為家は、「俊成五社百首」の序文からその成立事情を見出したと言っているのである。そして次に、

いま又浜千鳥跡ふむべくもあらぬ身に、再び勅撰をうけたまはり撰ぶべきにあたるも、末の世にはいよいよ人の心ざしも身のあやまりもかたがたおそるべきよしなれば、浦の浜木綿重ねて思ひ立ちて、文応元年九月のすゑ日吉にこもりて、祝成賢宿禰に申しあはせ侍りしかば神慮にやありけん、速やかに思ひ立つべきよしはからひ申すによりて、そのころほより始めて、霜月の中旬に詠みをはりぬる。そののち又思へば、石清水、北野にも心ざしありて、年の暮れに重ねて二百首を詠み加へて、次の年正月十八日によりみをはりぬ。古き跡にまかせてまつ日吉にもちてまゐりて、その後たよりにつけて本社にまゐらすべきや、心ざしばかりかきつけ侍る。返返すゑの世のわれらまこと少なくおよばぬ跡をはづといへども、かけまくもかしこくみそなはせ給へらん事は、昔いまかはるまじきをかたじけなくたのみばかりに筆に任せて、心に思ふことをかきつけ侍るなり。とある。再び勅撰集（続古今集）の撰者を拜命した為家は、あれこれと「恐る」こともあるため祖父の「五社百首」を踏襲し

て百首歌を各社に奉納しようと思ひ立って、九月末日頃に日吉社に参籠して祝成賢宿禰に相談すると、速やかに決心せよということなので、その頃から詠み始めて十一月に詠み終え、その後、石清水・北野社へも追加して翌年正月に詠み終えた。そして「古き跡にまかせて」つまり「俊成五社百首」に倣って、最初に日吉社へ奉納してから、その後は頼りに預けて本社に奉納しようと思ひ、心に思うことを書き付けたというのである。

また、「為家七社百首」の和歌にも、

和歌の浦に外の道やはまじるべき重なる跡を神しまもらば

(住吉・述懐)

神はよもうけじな竹の言の葉も重なる世々の跡をまもらば

(北野・竹)

苔衣同じ袂に世々かけて重なる跡に神は尊け

とあり、祖父俊成と同じ桑門撰者となつて勅撰集完成を祈る姿

が各所に見られる。やはり為家にとつて俊成と「重なる」という点において重要な意味があつたと思われる。

以上のことから、「為家七社百首」において「俊成五社百首」から踏襲したこと(共通点)を整理しておく。

①桑門ながらも撰者を拝命し、片や俊成は「千載集」完成記念、片や為家は「続古今集」完成祈念と、歌道への「恐

れ」という心情から、百首歌を奉納するという考えに至つたという動機。

②堀河題による百題百首を、伊勢・賀茂・春日・日吉・住吉各社に奉納するという奉納形式。

③後に二社追加するという詠作行為。

④日吉社へ最初に奉納し、残りは確かな頼りに付けて本社に奉納したという奉納順と及び奉納方法。

などである。また、その他にも挙げると、

⑤各社別奉納百首(非部類本)の書式。

⑥堀河題ごとに伊勢社以下の社格を意識した配列に改めた部類本の作成。

という点も共通している。

俊成自筆の社別奉納百首(非部類本)は、「住吉切」として春日社百首四葉(秋・冬・雑部の一部)、住吉社百首十葉(春・夏・秋・恋・雑部の一部)の断簡が現存する(「古筆学大成」小松茂美・講談社)。為家自筆には「詠百首和歌五首切」として住吉社百首の冒頭部分一葉が現存する(「日本書籍大鑑」小松茂美編・講談社)。これらによると、部立(春、秋哥、恋哥など)と歌題(堀河題)の書き位置や、和歌二行書きという卷子本の書式も共通している。

また題別の部類本としては、冷泉家時雨亭文庫蔵「五社百首」は元和七年書写ではあるが、奥書から俊成自筆臨模本であることがわかる。また同文庫蔵「七社百首」は為家監督書写本（巻頭巻尾のみ為家自筆）である。つまり各社別奉納百首（非部類本）だけではなく部類本も詠者本人が手掛けている。そして詠作順や奉納順ではなく、歌題（百題）別に伊勢社を筆頭として以下の百首の各歌を社格に合わせて配列し直しているのである。このように「七社百首」において為家は、形式・詠作行為・奉納順など、様々な点で「俊成五社百首」を踏襲しようとしていたことが見て取れるのである。

それでは、他に先に挙げたこと以外に踏襲していたものはないのだろうか。意識的・無意識的いずれにせよ、他に共通点はないのか、また為家独自の工夫がないのか、以降はそれらを確認していきたいと思う。

## 二、巻頭と巻末歌について

「俊成五社百首」「為家七社百首」は堀河題（堀河百首題）で詠まれており、この歌題を使用して奉納百首としたのは、俊成が早い例と考えてよいだろう。俊成は以前にも述懐百首に堀河

題を取り入れており、俊成と堀河題との関係はよく指摘されるところである。

さて、堀河題は「立春」から「三月尽」の春二十首、「更衣」から「六月祓」の夏十五首、「立秋」から「九月尽」の秋二十首、「初冬」から「歳暮」までの冬十五首からなる四季部七十首と、「初恋」から「恨」までの恋十首、「暁」から「祝」までの雑二十首という百題百首である。実際にどのように詠まれているのか確認したいと思うが、「為家七社百首」各社全てを対象にすると煩雑になるので、本稿では主に春日社百首について見ていくことにする。

俊成と為家の春日社百首冒頭「立春」の和歌を挙げると、

古里のまだふる年に春立ちて春日の山ぞまづ霞みける

（俊成）

うちいづる氷の隙の水屋川春日のどかに波やたつらん

（為家）

とある。「春日山」は春日社の背後にある三笠山を中心とする山々の総称であり、「水屋川」は三笠山の麓を流れる水谷川のこととで、摂社水屋社がある。為家の和歌では、春日社の名にちなんで春の日光のどかに立春を迎える様子を詠むことで、春日社を讃えている。したがって、奉納百首の冒頭として社に関連

する地名での立春を詠むことで、神の威徳を寿ぐ内容として  
るのである。

次に春日社百首の巻末にあたる「述懐」「祝」の和歌には、

春日山<sup>1</sup>谷の松とは朽ちぬとも梢にかへれ北の藤波

(俊成・述懐)

天の下のどけかるべし君が代は三笠の山の万世の声

(俊成・祝)

私もさぞわきてもいはじ春日山昔にもあらぬ人の心は

(為家・述懐)

万代も一つにまもれ天照るや天の児屋根の同じ契に

(為家・祝)

とある。俊成の「述懐」の和歌は、本稿の冒頭にも挙げたが、  
俊成はこの歌を「五社百首」の巻頭にも散らし書きにしており、  
家門再興への悲願の象徴としたものである。為家の「祝」の和  
歌の「天の児屋根」は、春日社の祭神・藤原氏の氏神であり、  
天岩戸の神話では祝詞をささげ、天孫降臨の際には五伴緒とし  
て付き従ったとされる神である。

このように、俊成や為家の場合、堀河題を使って奉納百首と  
するには、「立春」「述懐」「祝」題の和歌は「社頭立春」「社頭  
述懐」「社頭祝」といった奉納先に関する内容となっているので

ある。

四季の景物が主体である堀河題を奉納百首に使用するという  
ことは、おのずと四季部冒頭の「立春」題は奉納先に関連づけ  
ようと歌枕が詠まれることになり、巻末にあたる「述懐」「祝」  
題では奉納先と結びついて神祇的な祈願内容で締めくくられる  
という形式になるようである。このように百首歌の巻頭や巻末  
が神祇歌のように詠まれるのは、堀河題によるものだけではな  
い。

例えば「明日香井集」所収の春日社百首は、雅経が元久二年  
(一一〇五)七日間参籠して詠んだもので、春・夏・秋・冬・雑  
の各部二十首からなる部立百首である。そのうち雑部は釈教十  
首・述懐九首・長歌・反歌からなっている。また、雅経が昇進  
祈願のために多く述懐百首を詠んでいたことは、「明日香井集」  
1634や「拾遺愚草」2522の詞書から知られるが、この  
春日社百首もその内の一つであったと思われる。

春はまづ空のけしきぞ春日山峰の霞もはやたちにつけり

(明日香井集528春日社百首・春)

とあり、部立百首の冒頭の和歌であるが、立春であろうか春日  
山の春霞の様子が詠まれている。また巻末部分の述懐九首では  
公卿に列することを希求する歌や神の威徳を讃える歌などが詠

まれており、最後に沈淪訴嘆に用いられる長歌を備えている。つまり、雅経の春日社百首は、述懐・長歌・反歌の後半十首で述懐・沈淪訴嘆など祈願内容を述べる構成になっている。

俊成・為家の堀河題百首と雅経の部立百首も含めて考えると、奉納百首の最初の和歌では社頭の立春を、最後では社頭述懐・社頭祝を言挙げすることでまとめるといった構成を意識していたと言えそうである。

しかし、奉納百首であっても冒頭歌に奉納先の神社と関連の

ある地名を詠むとは限らないときもある。例えば、文治二年（一一八六）西行勸進の「二見浦百首」の場合は、

吉野山かすめる空を今朝見れば年は一夜のへだてなりけり

（定家・拾遺愚草101）

けふもなほかすめる空に雪ちりて花の春をもしらせ顔なる

（慈円・拾玉集501）

とあり、奉納先の伊勢社には直接関係のない内容となっている。奉納百首も存在する。

〔表1〕春日社百首における大和国以外の歌枕 「」内は堀河題または部立

	〔俊成五社百首〕	雅経〔明日香井集〕	〔為家七社百首〕
山城国	泉川〔河〕・泉川+笠置山〔五月雨〕 井手の玉川〔秋冬〕 鳥羽田〔早苗〕・深草〔掃衣〕 都+伏見+櫃川〔橋〕 宇治川〔綱代〕・八十字治川〔歳暮〕 都の糞〔炭甕〕・淀野〔菖蒲〕 小塩山+小松原〔松〕・磯崎〔野〕 （勸学院〔藤〕）	泉川+鹿背山〔夏〕 井手〔春〕 深草〔秋〕 植尾山〔冬〕 橋姫〔冬〕 山科+岩田小野〔秋〕	宇治〔綱代〕 小野山〔炭甕〕
摂津国	昆陽〔水鳥〕・長柄橋〔寒蒔〕 住吉〔海路〕・浅沢小野〔杜若〕	昆陽〔秋〕・三島江〔冬〕	
播磨国	須磨〔関〕	高砂〔春〕・野中清水〔夏〕・明石〔冬〕 娘捨山信遠国〔春〕・山田原伊勢国〔夏〕	
その他	東路〔駒迎〕・小夜中山遠江国〔旅〕 官城が原陸奥国〔萩〕	有乳山越前国〔秋〕・筑波嶺常陸国〔秋〕	逢坂関〔駒迎・関〕・交野河内国〔鷹狩〕 粟手森尾張国〔不逢恋〕・唐土〔海路〕



〔表2〕春日社百首における大和国の歌枕〔 〕内は堀河題または部立

歌数の合計	大和国				神話・祭神
	吉野	生駒 山系	布留 明日香	周辺 神社	
31首	吉野山〔残雪・雪・苔〕・御垣原〔春駒〕 阿太の大野〔薄〕	立田山〔立秋〕・竜田姫〔紅葉〕	葛城〔霞〕・高天山〔照射〕	石上+布留〔虫〕 檜隈川〔稲〕	天岩戸〔神楽〕 神〔懐旧〕
24首	吉野+音根が峰〔春〕 吉野+菜摘川〔冬〕・御舟山〔夏〕	立田山〔夏〕・朝原+片岡山〔冬〕 三室山+神無備森〔秋〕	葛城山〔冬〕・生駒山〔春〕 奈良志岡+岩瀬森〔夏〕	卷向+穴師山〔秋〕・桧原+三輪〔冬〕 明日香里〔春〕	神垣〔述懐〕・朱玉垣〔述懐〕
62首	片岡〔呼子鳥〕			古里〔夏〕 初瀬山+菅原+伏見里〔夏〕	春日山〔春・述懐〕 春日山〔春〕 羽賀山〔冬〕 春日野〔春〕 飛火野〔春〕 三笠山〔秋・述懐〕 佐保川〔述懐〕
				古里〔杜若・刈萱〕・敷島+大和路〔水鳥〕	御標の内〔菊〕 天岩戸〔七夕〕・天児屋根〔祝〕・鹿島が崎常陸国〔霞〕
				石上+布留〔苗代〕 明日香風〔薄・摺衣・歳暮〕・飛鳥川〔六月破・河〕・橘寺〔花橘〕	水屋川〔立春・早苗〕 春日山〔九月尽・神楽・松・述懐〕 春日+神垣山〔三月尽〕・神山〔泉〕 春日野〔子日・若菜・残雪・梅・柳・春駒・重・更衣・早苗・萩・女郎花・藤袴・露・野・懐旧〕 飛火野〔早蕨・卯花・虫・鹿・雪〕 三笠山〔春雨・郭公・五月雨・霧・月・紅葉・鶴山〕・三笠森〔麓〕 猿沢池〔水〕・森橋〔橋〕 佐保川〔千鳥〕・佐保山〔霞・帰雁・初雁〕 古き都+九重〔桜〕・奈良都〔逢不遇恋〕・奈良〔初冬・時雨〕

〔後成五社百首〕

雅稚〔明日香井集〕

〔為家七社百首〕

### 三、春日社百首における歌枕

この章では、歌枕が奉納百首の中でどのように詠まれているのか、確認していきたいと思う。

先に挙げた「表1」「表2」は、「俊成五社百首」「明日香井集」「為家七社百首」所収の各春日社百首から、歌枕を抜き出し、国別（地域別）に振り分けてまとめたものである。

「表1」で挙げた俊成や雅経の山城国の歌枕は、伏見・宇治川・泉川・井手川など、おおよそ京から奈良へ至る奈良街道沿いであり、これらも春日社参詣の際に通るといふ点で春日社ゆかりの地と言える。それに対し、為家の場合は上記のような地名はなく、「表2」にあるように吉野関係の地名すらも詠んでいない。つまり為家はより厳密に春日社に近くて関連の深い場所を選択し、その歌数も圧倒的に多く詠んでいるのである。

「表1」に挙げている春日社とは関係のない歌枕として、摂津・播磨・常陸・陸奥国などの地名も詠まれてはいるが、為家の場合は「駒迎」「海路」題など大和国の歌枕では表現できない題のときであり、それに対して、俊成や雅経の場合は、社に関連のある地名を詠むという制約としては比較的緩やかであり、為家ほどに厳密ではないと言える。

また、春日社と関係のある場所を詠んだ和歌や「神」「玉垣」「標」など神域を表す神祇的な表現を詠んだ和歌、つまり奉納先を意識して詠んだと思われる和歌が百首の中で何首あるのか見てみると、俊成四十六首、雅経三十二首、為家六十三首である。このように春日社関連の歌枕の選択およびその使用頻度において、俊成・雅経と為家との間には意識の違いが見て取れるのである。

さて、堀河題による春日社奉納百首は俊成や為家だけではなく、家隆の嫡男隆祐も詠んでいる。「隆祐集」所収の自歌百番歌合には「春日社百首」が五十首ほど番われているが、歌題のみを挙げて、

立春・鶯・残雪・若菜・霞・梅・柳・春雨・帰雁・款冬・更衣・早苗・蓮・氷室・蚊遣火・螢・初秋・霧・月・駒迎・薄・女郎花・蘭・萩・初雁・虫・擗衣・初冬・霜・網代・炭甕・氷・雪・初恋・初逢恋・逢不遇恋・思・旅恋・後朝恋・不逢恋・懐旧・述懐・暁・橋・夢・松・竹。（「夫木抄」に卯花・早蕨）

である。これらは四季部・恋部・雑部にわたっており、隆祐の春日百首は堀河題で詠まれたと考えてよいだろう。また、この百番歌合は定家（京極中納言入道）の朱点があるということな

ので、隆祐の春日社百首は『為家七社百首』より三十年ほど前には成立していたということになる。春日社百首の「述懐」の歌に「かれやらぬ藤のすゑ葉のかひもなくまだ紫の衣ならねば」（隆祐集237）とあるので、四位以前の従五位上行侍従の頃の詠であらうか。

隆祐が春日社百首で堀河題による奉納百首という形式を選んだのはおそらく『俊成五社百首』の影響によるものと思われるが、祈願内容としては雅経の春日社百首と同じように昇進祈願の述懐百首であったと思われる。また、奉納先を意識して詠んだと思われる和歌が百首の中で何首あるのか見てみると、隆祐の百首は四九首現存中七首である。俊成の影響であろう堀河題の奉納百首だとしても、百首の半数しか現存していないが、奉納先に関する歌枕の割合は少ない方と言えるだろう。

以上のことから、為家のような歌枕に課した厳密な制約というのは珍しかったと言える。しかし一方で、奉納百首であっても奉納先とは関係ない地名を敢えて詠むという百首もある。例えば、先に挙げた『二見浦百首』、後鳥羽院の『内宮百首』『外宮百首』などでは、あえて各地の歌枕を詠むことで、四季の變化、各地の様子、天地・人倫など、あらゆる事象に遍く加護を示すという神の力を象徴する意味合いもあって、その万象性を

歌枕によって讃えていると思われる。そういった作品も詠まれてはいたが、為家は奉納先を強く意識して歌枕を詠むということを選んだのである。

#### 四、和歌表現

雅経の春日社百首は部立百首であり、後半十首で述懐や沈淪を述べるように構成されていたが、俊成・為家・隆祐の場合は堀河題を選択しているという点で、祈願内容を込めた和歌、述懐的な和歌をどの位置に詠むのかが問題となってくる。

小塩山小松が原は茂くとも頼む梢は神もわかむ

（俊成・松）

世を捨てば吉野の奥に住むべきを猶頼まるる春日山かな

（俊成・山）

昔をば神もあはれと思ひ出でよ月に山路を十年見し人

（俊成・懐旧）

春日山松に昔のあととめて祈る心はいまもたがふな

（為家・松）

呉竹のよよに重なるわが道をなとうきふしに人のなすらん

（為家・竹）

昔より折りおきける春日野のおどろの道のすゑもたがふな

(為家・野)

思ひいづる昔ぞとほき桜花かざしはじめし春日野の原

(為家・懐旧)

とあるように、よく指摘されることであるが、堀河題の雑部がその役割を担っている。

また各和歌の典拠や影響について、詳しくは別の機会にした  
いと考えているが、俊成の春日社百首では太公望(柳)・伯夷叔  
斉(早麿)・陶淵明(春雨)・蘇武(帰雁)など漢籍の影響が目立ち、  
為家の春日社百首場合では「見らくすくなき(鶯)」このくれ  
まれ(残雪)「道のながて(旅)」など万葉集(万葉語)の影響が  
目立つ。春日社周辺が万葉集時代の舞台と重なるという点もあ  
って、為家は「明日香風(薄・摺衣・虞登)」など繰り返し使用し  
ている。つまり春日社百首において、俊成の場合は漢籍の影響  
歌も重要な百首歌の構成要素と考えて詠み入れているが、為家  
の場合は万葉語を他の百首に比べて、やや多く詠み入れている  
ようである。百首の表現世界においても、時代の好みもあろう  
が、意識の違いが確認できるのである。

おわりに

為家は再び勅撰集撰者を拝命することで、御子左家の先代つ  
まり桑門撰者であった祖父俊成や、生涯二度も撰者となった父  
定家と「重なる世々の跡」という運命を感じ取ったのであろう。  
そういった中で、為家は先例の「俊成五社百首」に倣い、「言の  
葉」も重ねて「七社百首」を詠作したのであった。そのため各  
百首の雑部では歌道に関する和歌が非常に多い。

そして為家が「俊成五社百首」に重ねたものは、詠作動機・  
堀河題で複数の社に百首歌を奉納するという枠組み・新たに奉  
納方法を追加するという詠作行為・日吉社からという奉納順・奉  
納方法・部類本の作成などであり、まるで重要な「儀式」をた  
どるかのようなのである。したがって為家にとって「七社百首」と  
いう作品は、祖父俊成が通った道を追体験するものという意味  
合いがあり、そうすることで歌道への思いも重ねたのである。

このように「俊成五社百首」という「型」を踏襲して詠作さ  
れた「為家七社百首」であるが、しかしその和歌の表現世界(特  
に四季部)は俊成の百首とは異なっていた。和歌で詠まれるこ  
との少ない神社ゆかりの地をあえて詠み入れたり、神社ゆかり  
の地域に限って繰り返し同じ地名を詠んだり、神社周辺という

他の歌人の百首よりいっそう狭い範囲の中で詠もうとしているのである。つまり、為家は奉納百首の四季部を神社やその周辺の四季を描く場と設定して、神の恵みにより季節が廻るということを和歌で表現したのである。そうすることで神の威徳を讃えようとしたのであろう。このように歌枕に対する制約も厳しいものがあり、至る所で為家のこだわり・独自性が見える作品ともなっているのである。

〔注〕

(1) 以下の資料の引用本文については「新編国歌大観」に換る。引用本文には便宜上わたくしに仮名に漢字を当てたところや通行の漢字に改めたところがある。

(2) 『俊成五社百首』の一連の書き付けに関しては、松野陽一氏『藤原俊成の研究』（笠間書院・一九七三年三月）、佐藤恒雄氏「御子左家三大の悲願」（『藤原為家研究』笠間書院・二〇〇八年）などに詳しい。

(3) 佐藤恒雄氏は「七社百首考」（『藤原為家研究』同上）において、反御子左派（真観の離反と将軍への接近）への為家の憤りを和歌表現の中から指摘している。

（ふくとめ たまみ／本学非常勤講師）